

《論文》

サーフパトロールにおける言語活動と コミュニケーション能力の育成

—緊急時の談話の構造と特性—

立川 和美, 稲垣 裕美, 小粥 智浩, 小峯 力

Communication in Surf Patrol and Cultivation of Communicative Competence:
Through Analyzing the Discourse Structure of Emergency

Kazumi TACHIKAWA, Yumi INAGAKI, Tomohiro OGAI, Tsutomu KOMINE

キーワード：ライフセービング、サーフパトロール、コミュニケーション能力、緊急時の談話、談話構造

Keywords: Life Saving, Surf Patrol, Communicative Competence, Discourse of Emergency, Discourse Structure

[要 旨]

ライフセーバー育成現場におけるコミュニケーション能力の向上のためには、「言語能力」「非言語能力」「精神的な能力」の3方向からの総合的な指導が必要とされる。本稿では、ライフセービング活動の中でもサーフパトロールに着目し、特に遊泳者とのやりとりや救助活動における発話といった「言語活動」について、言語理論およびライフセーバー養成の指導者に対するアンケートを通じて、考察を行った。その結果、緊急時の談話においては、一定の談話構造が構成されており、それをトレーニングに積極的に活用することによって、正確で迅速な救助活動を促す可能性が示された。さらに、特に指導者からは、溺者との信頼関係を築くことが救助活動におけるコミュニケーションにおいて重要であり、それらがライフセーバーの言語表現にも反映されることが示唆された。

1. はじめに

ライフセービングの指導現場におけるコミュニケーション活動のパターンは、「ライフセー

バー（学習者）対ライフセーバー（学習者）」「ライフセーバー（学習者）対被救助者」「学習者対指導者」等、極めて多様である。また、ライフセーバーとして育成されるべきコミュニ

ケーション能力については、「言語能力」,「非言語能力(ボディランゲージ,視線,手の動きなど)」,「精神的な能力(相手へどのような形で働きかけられるか)」の3つの方向が考えられ、これらの育成に総合的な指導が必要とされることは、いうまでもない。

そこで今回は、これらの能力が様々な形で活用されるライフセービング活動の中のサーフパトロールにおけるコミュニケーションにフォーカスし、そこでの言語活動の特徴を言語学的視点から分析することで、ライフセーバー養成における言語技術について考察を行いたい。加えて、ライフセーバー養成の現場で現在考えられている、言語に関わる問題についてもとりあげていくことにする。

サーフパトロールにおけるコミュニケーションとしては、ライフセーバーの「音声言語活動」と「文字言語活動」、更に標識や看板、フラッグなども重要な役割を果たす。音声言語については、パトロール中の遊泳者とのやりとりや救助活動における発話が、また文字言語については、パトロールログやレポート作成などが挙げられる。本稿においては、主に音声言語について、言語理論の視点からその特徴を探ると共に、実践的な言語能力の育成に向けて、指導者に対するアンケート調査を行い、具体的な指導の方法論について考察する。

2. サーフパトロールについて

2. 1. サーフパトロールの活動と内容

日本の海水浴場の中で、日本ライフセービング協会が関与している海水浴場は約15%であり、海水浴場における安全管理については多くの課題が残されている^(注1)。このような現状から

も、数多くのライフセーバー育成が求められており、有資格者によるサーフパトロール(監視活動)の全国的な普及は急務といえよう。

サーフパトロールにおいて、ライフセーバーは、海水浴場内外の情報を統括し、放送器材などを用いて場内を管理する。また、事前に情報を収集した上で、海況・気象の変化を予測し、周知させる。さらに日々のパトロールログ(日誌)と事故対応時における各種レポートの記入を行う^(注2)。海での水難事故の約50%は、6月から8月の海水浴シーズンに集中し、時間帯別レスキューの割合は午前10時から午後3時にかけてが多いため、ライフセービングは、暑熱下での体力的・精神的にハードな仕事である。

パトロールの実際は、「監視塔」—「レスト」—「ビーチ/海上パトロール」の3つの各ポジションを15分から30分を目安に交代しながら監視を実施するローテーションシステムがとられるが、これはパトロール中に一方のライフセーバーが救助に向かった際、残ったライフセーバーが監視本部や監視塔(タワー)への無線報告(状況報告や応援、救助支援要請など)を円滑に行うためである。また、こうした他をフォローする他にも、多方面から情報を集めたり、気分転換を図るために、交代は有効である。複数のメンバーで活動することで、有事の際の連携やサポートが可能となるわけである。

また組織的には、パトロールキャプテンと第一タワーキャプテン、第二タワーキャプテンとが連携し、それぞれが本部と連絡をとりあってレスキュー活動が行われる。

2. 2. サーフパトロールにおけるコミュニケーションの器材とその特徴

海水浴場におけるパトロールでは、天候や周

囲の雑音によって、伝達が困難になる場合があり、次のようなコミュニケーション手段が用いられる。

海水浴場内放送：

海水浴場内の海浜利用者全員への一斉情報伝達として、緊急避難、安全周知、迷子の捜索依頼や保護者呼び出しなどに有効な機材。但し、通告の内容によって海浜利用者にパニックを引き起こさせる可能性もあり、使用の際には、表現や語調に十分な注意が必要とされる。

無線：

遠くの相手に言葉を用いて伝達できる機材。これについては、次章で詳説する。

拡声器：

遊泳区域内の呼びかけ等、局所的な範囲へのコミュニケーション手段に有効な機材。

ホイッスル：

通信機器が使えない場合の伝達器材。遊泳者に注意を促す場合は、不快感を抱かぬように、威圧的な態度を避け、注意された理由が理解できるようにやさしく伝える^(注3)。

この他、シグナルフラッグや携帯電話も活用されるが、インフォメーションの手段としては、利用者に海水浴場内のさまざまな状況を知ってもらう「インフォメーションボード」^(注4)や、絵によって理解させる「標識」^(注5)、遊泳者が沖で戻れない場合に自分で出す「助けてサイン」などがある。

以上、サーフパトロールの概要をまとめてきたが、次章は「無線」を用いたサーフパトロールコミュニケーションについて考えていきたい。

3. 無線による緊急時のコミュニケーション

3. 1. 実際の活動

サーフパトロールにおいて、無線によるコミュニケーションは大きな役割を果たすが、日本ライフセービング協会編(2008)では、緊急時には、冒頭に「レスキュー・レスキュー・レスキュー」と3回いい、それに続けて「3つのP」(位置position・人数people・状況problem)を明確に伝える^(注6)とされている。またこの活動の目的について、Surf Life Saving Australia Limited(2004)では、次のように説明している。

Emergency call

The emergency call for SLSA is 'rescue, rescue, rescue'. This call is used for two main purposes:

- 1 to clear the network of routine traffic; and
- 2 to advice the Surf Rescue Communication Center or club base station that you have a situation that requires immediate assistance.

さらに、日本ライフセービング協会編(2008)には、緊急救助の手順や指示、応援要請などについて、以下のような連絡のやりとりの例が示されている。

Aタワー：

レスキューレスキューレスキュー。こちらAタワー。現在Aタワー正面前方50メートル沖に女性3名が溺れています。〇〇がレス

キューボードで救助に向かっております。どうぞ。

本部：

こちら本部、了解しました。本部から一名応援に行きます。詳細を随時お知らせください。どうぞ。

Aタワー：

こちらAタワー。了解しました。先ほどの女性3名のうち1名が重溺の様です。救急車の要請をお願いします。どうぞ。

本部：こちら本部。了解しました。

また同様に、Surf Life Saving Australia Limited (2004) では、次のようなシナリオが示されている。

Club calls:

'rescue, rescue, rescue, Broadbeach IRB Broadbeach IRB, this is Broadbiach patrol, over.'

IRB replies:

'Go ahead Broadbeach Patrol, this is Broadbeach IRB, over.'

Club calls:

'Broadbeach IRB, 100meters north of the flags, 400meters offshore, we have five swimmers caught in a rip, we have dispatched two rescue boards, please assist, over.'

IRB replies:

'Wilco Broadbeach Patrol, IRB, out.'
The Surf Rescue Communication Center station will the organize other clubs and/or rescue services to attend the area.

こうしたやりとりについて、言語学的には一定の構造を認めることが可能であり、その談話構造をライフセーバーが理解することによって、その枠組みを応用し、様々な状況に応じた情報伝達が可能になることが予想される。すなわち、ライフセーバーによる情報構造の獲得は、より確実に迅速な情報伝達に貢献すると考えられるわけである。そこで次節では、物語構造に関する先行研究を概観し、これを援用することでレスキューの談話構造の認定を行いたい。

3. 2. 言語学から見た無線によるコミュニケーションの談話構造と特性

文章は全体として、統一性、完結性を持つ一つの意味的なまとまりであると考えられるが、言語学においてこれを全体的にマクロ的視点からとらえようとする研究領域がある。具体的には、「起承転結」や「序破急」といった「構成」、つまり「プロット（どのように内容を描出するか）」の研究や、いわゆるプロップのロシアの民話分析、ダンダスのアメリカインディアンの民話分析に見られる「ストーリー（描かれる内容自体）」に関する研究などがこれにあたる。そしてこれらは、今回のレスキュー伝達の談話分析に応用性が高いものと考えられる。そこでここではまず、この両者の方法論を簡潔に説明したい。

ロシアの民俗学者W.プロップ（2009：1972初出）は、ヤコブソンを中心とするロシアフォルマリストたちが作った基本概念を応用することによって、ロシアのおとぎ話の変形過程を研究した。プロップはロシアの民話の形態学的構造を全体的に検討し、「機能」という単位を立て、具体的な話は抽象化した「機能」の「変項」として認めた。もちろん個々の民話の具体

的な現れ方において、場合によってはある機能が脱落するケースもあるが、基本的には一定の順序で配列されており、そこからすべての魔法民話は構造的には同一であると結論づけた。

これを応用したものがアメリカの民俗学者ダンダスのアメリカンインディアンの民話分析(1980:1962初出)である。彼はプロップの「機能」にあたるものを「モチーフ素」という単位として設定し、それらが一定の順序で配列されている構造を認めた。

テキストの全体構造としては、この他、ドイツのペッチ(Petch)による「なぜなぜ」の構成要素の研究、アメリカの社会言語学者ラボヴらによる「生命の危険を感じたような出来事」という語りの構造の一般化などがある。ラボヴは、談話分析の中でも特にVariationist(変異体分析)という言語のvariationの社会的・言語的なパタン化の研究にも取り組んでいる。

さて、前節でも述べたように、言語学における物語構造の研究は、緊急時のレスキュー通信の方法に应用が可能であると考えられる。本稿では、この物語構造の例として、Labov & Waletzky (1967), Labov(1972)に示された物語構造の6つの要素を取り上げる。以下にその概要を示しておきたい。

1. Abstract: 物語における中心的な行動や要点をまとめる。
2. Orientation: その物語の場所や状況、登場人物を同定する役割を果たす。
3. Complicating action: 物語の中で何が起きたのかということを説明する中心部分である。
4. Evaluation: 語り手がなぜこの物語が伝えられる価値があるのかを説明する。
5. Result or resolution: 最終的に何が起こっ

たのかを述べる。

6. Coda: 語りが終わった後、現在のコンテキストに戻すため発話。

これらが、いわゆる「物語」の構造であるわけだが、以下では以上の構造が、サーフレスキューの緊急時の談話構造にどのように応用できるかを考えてみたい。物語とサーフレスキューは全く異なるジャンルの異なる性格を持つディスコースであるが、「一連の事象」について語るなどの似通った特質も持っている。そこで、上記の6つの要素を、ライフセービングの談話に照らし合わせて具体的に検討していきたい。

まず、物語の語りにおいて、「3. Complicating action」は時間の流れに沿う要素であるが、ライフセービングでは、事故という時間的流れを持つ事象の説明を行う際、事態の結果(事故内容)を中心とし、さらに必要に応じてその根拠(原因)を加えるという単なる時間の流れとは異なる叙述方法をとる。これは、救助の目的が、安全な事態の収拾にむけたものであるためである。すなわち、「1. Abstract」, 「3. Complicating action」 「5. Result or resolution」が、ライフセービングでは極めて重要な要素であると言える。加えて、物語では語り手が自らを名乗ることはないが、ライフセービング活動では「名乗り」の行為が必ず行われるという点でも大きな違いがある。

また、「4. Evaluation」は、セーバーと本部との会話で構成されるライフセービングの談話では、主に本部からの指示に近い性格を持つが、状況によっては、それに対する現場のライフセーバーの判断も含まれる点は、注意が必要であろう。この他、必要な情報が完結したことを

明示するために、「6. Coda」はレスキューの談話で不可欠な要素といえる。

ここから、緊急時のコミュニケーション活動の談話では、構造構成の要素として、物語の構造の要素を援用することが可能ではあるが、それは物語のような線的な流れではなく、立体的な構成を成すものと認めることができる。そして言語構造的には「1. Abstract」の下位項目としての「2. Orientation」「3. Complicating action」「5. Result or resolution」がライフセーバーの側から示され、それに応答する本部が「4. Evaluation」を提示するという内容が主要な部分を構成し、これに「6. Coda」が必ず付け加わることになる。この「6. Coda」は、一般の談話においては必ずしも現れることがなかったり、ほのめかされたりする程度の要素であるが、救助活動では必要な情報が授受され、それが完結したことを示すために必ず挿入される。具体的には、ライフセーバーと本部との二者間によって構成される以下のような構造が考えられる。

〈ライフセービングにおける緊急時の談話構造〉

1. ライフセーバー：

状況概要説明「1. Abstract」

自己の名乗り、場所、人数「2. Orientation」

現在状況（必要に応じて原因の提示）

「3. Complicating action」「5. Result or resolution」

2. 本部指示：

具体的な判断提示「4. Evaluation」

3. ライフセーバー：

本部の指示に対する応答提示

「4. Evaluation」「5. Result or resolution」

コミュニケーション終了の合図「6. Coda」

4. 本部返答：

コミュニケーション終了の合図「6. Coda」

このように、二者のやりとりによって成立している談話ではあるが、物語構造の要素を援用し、組み替えた形で、ライフセービング活動の談話構造を考えることは可能である。

ところで、こうした談話構造も文化による影響があることが、既に先行研究において指摘されている。たとえばKaplan (1966) は、様々な文化圏から集まってきた留学生の作文指導を通じ、パラグラフ構成に一定の傾向を認め、contrastive rhetoricというテキストの談話構造の類型を唱えている。

また、Hindsの一連の研究は、日英語の対照比較であるが、両者の文化・思考のパタンの違いを明確に提示している。Hinds (1983) では、朝日新聞の「天声人語」をテキストとして、Unity, Focus, Coherenceについて、日英母語話者に採点をさせたところ、英語母語話者の方が2ポイント程度低かったことを報告している他、Hinds (1987) では、テキストにおいて日本語では読み手に責任が、英語では書き手に責任があると考える傾向があることを示している。さらにHinds (1990) は、論説文の議論構成として、deductive（演繹的）とinductive（帰納的）に加えて、日本語の言語テキストではquasi-inductive（擬帰納的）という論理構成が存在することを示唆している。そしてこれは、読者に書き手の陳述について考えさせ、独自の結論を導き出させようとする論理展開であるとされている。

この他、池上 (2006) は、日本語のテキストは主観的把握に基づいて構成される一方で、英語のテキストは客観的描写が好まれる傾向にあ

ることを指摘している。

これらから、日本語話者が情報伝達を行う場合、当事者的に事態を伝達する特徴があり、またその論理構造は英語母語話者とは異なる傾向、Hindsによれば、英語話者にはその主張や論点が見出しにくい傾向を持つということがいえるだろう。

ライフセービングのことばについては、立川・稲垣・小峯（2012）でも指摘したように、英語をもとに構築されているため、サーフパトロールでの談話構造も基本的には同様の性質を持つ。よって、高度の客観性が求められるレスキューの現場では、日本語による救助活動の際、その談話構造の原則に従うことに加え、発信者の姿勢にも注意が必要となる。具体的には、客観的な状況把握とその言語化、また極力内容を明確に表現する努力などが挙げられる。これは、日本語の表現者が無意識のうちに陥る、主観性の強さや曖昧さを排除するためである。

また、被救助者は正常で冷静な状態ではなく、通常のコミュニケーションができないことが多い。そこでライフセーバーは、言語理論に基づく事故の発話に関する注意点を認識しながら、コミュニケーション活動を行っていく必要があるといえよう。

4. ライフセービング活動におけるコミュニケーション能力向上の課題

4. 1. 先行研究から見た言語能力の向上について

テキスト言語学や談話分析では、Austin（1971）の「発話行為」等の語用論の影響を受け、文脈や、発信者と受信者との関係、情報伝達の手段、発信者の意図、受信者の解釈などに

ついて考察が行われている。ここでは、言語研究や語学教育をライフセービングの談話学習へ応用する方向性について考えるため、まず、談話分析を言語教育に応用した研究を取り上げたい。

高野（2006）では、談話（＝ディスコース）を語学教育に持ち込む2つの方法を示している。それは、言語に関する知識をいくつものテキストに応用させることによって、「言語運用能力を向上させようとするもの」と、「言語のあらゆる部門に関わる情報が有機的に関連しあっていることを学習者自身に発見を通じて、言語運用能力を向上させようとするもの」である。この語学教育の方法をライフセービング教育に応用しようと考えたと、前者は、大教室における講義形式と言う点でありあまりなじまないものの、後者は小教室での対話形式をとり、学習者の発話が多いという点から、十分応用できるものと判断できる。

また、山内他（2006）では、救急救命士を目指す学生のコミュニケーション能力向上を目的としてコーチング実習^(注7)を導入し、コーチング実習前後の情動知能指数（Emotional Intelligence Quotient, EQ）^(注8)によって、行動特性を評価したところ、心内知性、対人関係知性、状況判断知性の値が優位に高くなったことを確認している。こうした実践は、ライフセーバー養成にも直接的な応用の可能性が大きく、示唆に富むものと言えるだろう。

4. 2. 現場の指導者が考える言語指導の課題について

本稿では、上述の先行研究を踏まえ、実際のライフセーバー養成におけるコミュニケーションの課題を明らかにするため、指導に携わ

る教員等を対象に、アンケート調査を行った。本節ではその結果と考察を行う。具体的には、ライフセーバー歴4～18年の3名の指導者（年齢：20歳代～30歳代）に対して、質問紙形式の記述式調査を実施した^(注9)。質問事項は、以下の通りである。

質問A ご自身がライフセーバー養成教育を受けた時に、「言語」「コミュニケーション」といった項目について具体的にどのような教育を受けましたか？

質問B ご自身がライフセーバーとして活動を始めて以降、現場において「言語」「コミュニケーション」に関して苦勞したこと、反省したことなどはありますか？また、ある場合は、どのようなことですか？

質問C 現在、ライフセーバーを志望する学生たちを指導するにあたり、特に注意していること、気を使っていることはどのようなことですか？（これは、「言語」や「コミュニケーション」とは関係なく、指導内容全般についてお答えください。）

質問D 現場で指導している実践を考えた場合、「言語」や「コミュニケーション」活動に関して、ライフセービングで大切なことはどのようなことだと考えますか？

質問E 質問Dでお答えになったことを達成するために、学生たちにはどのような指導が大切だとお考えになりますか？具体的なアイデアなどがありましたら、お答えください。

以下、調査結果について見ていくことにする。順番が前後するが、質問Cは、指導者として注意していることについて全般的な回答を求めたものであるため、まずこれについて取り上げた

い。結果は、以下のものであった。

- ・しっかりと上下関係を作った上で、言動、コミュニケーションをとるようにしている。
- ・自分中心に考えてしまいがちだが、相手（溺者や疾病者）を考える。その人のためになるか考えることの大切さを伝えている。目を見る、表情を見るなど。
- ・説得するのではなく、納得してもらうこと（自分ばかり主張しない）。

いずれにおいても、救助の技術的な向上を支える基盤としての、救助活動に向かう基本的な姿勢が指摘されている。相手の立場を優先し、相手の利益や理解をふまえた行動（説得するのではなく納得してもらう）をとることが重視されており、ここから、指導者は、ライフセービング指導が人格の形成や人間としての在り方（相手のためになるかを考えることの大切さ）に深く関わっているという考えを持っていることが分かる。

上記の他に、「小さな変化（良いこと・悪いこと）に気づいて、その時タイミングを外さずに評価する」という指摘もあり、学習者個人の成長に細かく配慮する指導者としての自らの姿勢にも注意を払っていることが示されていた。

次に、コミュニケーションに関する質問についてまとめていきたい。

質問Aは、指導者自身が受けたコミュニケーション教育についてであるが、以下のような回答が見られた。

- ・ライフセービング部を通じて、合宿・監視活動といった団体生活の中で、上司・先輩と

いった人たちへの言動やコミュニケーションの取り方を学んだ。

- ・溺者や疾病者に対するものと、ライフセーバー同士で行うものがある。大人から子供まで相手にしているので、言葉かけは大切だし、注意が必要。コミュニケーションについてはシグナルやその手段についても学んだ。
- ・相手の立場や気持ちになって、言葉を選んで接すること。常に相手のためになるようにコミュニケーションを図る。

これらの回答では、社会における礼節をふまえた態度の重視、さまざまな受信者に対するコミュニケーション能力の獲得、さらに受信者をコミュニケーションの中心に置く姿勢などが指摘されている。ここから、自身の受けた教育が、現在の指導者としての在り方に大きく影響を及ぼしていることが分かる。全般的に、受信者の属性や立場を踏まえながら言葉を自ら発していくという姿勢を学んできたということができよう。

次に、質問Bは、ライフセーバーとしてコミュニケーションを行う上で感じた課題について、回答を求めたものである。

- ・ともに生活する中で、上司・先輩に対して慣れが生じてしまう場合がある。相手の立場をわきまえた上で言動・コミュニケーションをとるようにしている。
- ・外国人に対して、英語以外となると全く伝わらず苦労した。耳の聞こえない人の時も同様だった。安全な場所へ誘導する時は言葉がけひとつで成果が変わる。注目されないと伝わらない。
- ・自分の伝えたいことをただ伝えるだけでは相

手に受け取ってもらえない。(監視中の声かけの注意の仕方)。なので、相手の気持ちをいかにくみ取って、伝えたいことを伝えていくかが大事だと思う。

実際のライフセーバーとして多くのケースに遭遇している指導者の生の声として、いずれも極めて貴重な回答が多く示された。特に、英語以外を母語とする人や聴覚障害者の救助の困難さや、自分が理解したことを相手に伝達する上での表現の工夫の重要性は、実際の現場に出たプロならではの意見と言えよう。こうした実感を伴う指摘を、現場の教育の中に取り入れることは、コミュニケーション方策を考える機会の提供に貢献するものと考えられる。コミュニケーション能力向上に向けた大きな効果を期待できる資料としても、きわめて有効だと言えるだろう。

さて、質問D、Eでは、「コミュニケーションの指導」として求められる内容や指導法について、具体的な回答を求めた。ここでは、以下の指摘が見られた。

質問D 現場で指導している実践を考えた場合、「言語」や「コミュニケーション」活動に関して、ライフセービングで大切なことはどのようなことだと考えますか？

- ・相手の立場を考える。
- ・実際のレスキュー手段として一番に、安全ですぐにとれる手段であるので、危険に早く気が付き、初期防止として言語やコミュニケーションでのアプローチをすることが大切だと考える。
- ・どのような対象(年上、同世代、子供)にも

対応できるような、礼節、明るさ、安心感の3つを養うこと。

質問E 質問Dでお答えになったことを達成するために、学生たちにはどのような指導が大切だとお考えになりますか？具体的なアイデアなどがありましたら、お答えください。

- ・指導者自身が普段から怠ることなく、行動を意識して行うことが学生に対しての刺激になると思う。
- ・状況を判断し、それに合う言葉がけができるかのトレーニング。息が上がった時にちゃんと聞きとれる大きさ、テンポでの話すトレーニング。日常生活においてこそ、練習するチャンスが多いと考えます。
- ・人前に立って発言する機会を増やす（他者を意識させる）。そして、自分自身が見本になれるよう実践していく。

質問Dでは、レスキュー現場でのあらゆる対象に対応可能なコミュニケーション能力の育成が求められており、それが初期段階での有効な事故防止の手段となり得ることが認められている。その上で、Eの回答では、指導者自身の姿勢を自戒するとともに、具体的なトレーニング方法（テンポや声の大きさなど）に言及が見られ、指導者は実践の場に直結することを常に意識しながら指導を行っていることが分かる。

以上から、指導者においては、コミュニケーション活動の重要性の認識がすでに十分になされていることが明らかになった。またこれに加え、今後、その豊富な経験をさらに具体的に指導現場に還元できる可能性が示唆された。

言語活動は、単に言語表現だけではなく、人

間の身体性や意識、思考、認知などに深く関与する。話し手がある文脈において特定の目的を持って発話し、それを聞き手が受信するという行為を通じて会話は成立するが、この際、話し手と聞き手とが互いの役割を果たすことが期待される。特にライフセーバーには、サーフガードの場面において、状況に応じたボライトネスやターンテイキングなどの技術が必要とされている。とりわけ緊急時の救助活動の発話においては、発話者の意図、選択された表現、音調が問題となる。

また、迅速で的確な救助活動には、適切な観察と情報収集、そして正確な判断が必要である。このため、短時間で溺者との信頼関係を築くことができるようなアプローチの技術も求められる。

日常のコミュニケーションでは、無意識に行われる要素が大部分であるが、トレーニングを通じて意識的なコミュニケーション活動の在り方を学ぶことは可能である。今後は、普段のトレーニングの中に、コミュニケーション活動に特化し、その意識化を図るような指導を適宜組み入れるなど、実践的なコミュニケーション能力の育成を可能とする方法を探っていきたい。

注

(注1) ライフセービング協会による2006年の調査では、ライフセービング協会が関与している海水浴場の数は、千葉県65か所、東京都18か所、神奈川県23か所など関東圏に多く、福島県、青森県が1か所、宮城県、福岡県、長崎県、鹿児島県がいずれも0か所、沖縄県6か所と、他の地域では少ない傾向が見られる。

(注2) こうしたレポートをもとに、短期（1日）から長期（1年）の中で、計画plan（人／物資／資金）、実行do（長期・短期）、評価check、改善action（継続／改善／廃止）を確認していく必要がある（日本ライフセービング協会編2008）。

(注3) ホイッスルの使用においては、長音は緊急事態

や重大な事故を、短音は呼びかけ、注意を示す。

- (注4) インフォメーションボードは気温・水温・潮の流れ・潮汐・離岸流の場所、遊泳区域・トイレの位置、主な禁止事項などを記入し、海水浴場入り口などに設置される。
- (注5) その日の遊泳条件を青(遊泳可)、黄(遊泳注意)、赤(遊泳禁止)で海浜利用者に知らせるための旗。
- (注6) 3つのPについて、Surf Life Saving Australia Limited.(2004)では以下の4項目が挙げられている。
- 1 people, e.g. the number of swimmers;
 - 2 problem, e.g. caught in a rip;
 - 3 position, e.g. the location of swimmers (use a clearly identifiable landmark) ;
 - 4 progress, e.g. how the rescue is being carried out, updated information.
- (注7) コーチングは、従来の指示命令的な指導法ではなく、「答えは常にその人の中にある」ことを前提に、相手に問いを投げかけることにより考えさせ、答えを導くコミュニケーションスキルとされている。
- (注8) EQ構成要素は以下のとおりである。
- 心内知性 = 「自己認識力」「ストレス共生」「気力創出力」
- 対人関係知性 = 「自己表現力」「アサーション」「対人関係力」
- 状況判断知性 = 「対人受容力」「共感力」
- また、この実習の内容は、コーチングの基本技術「傾聴」「質問」「承認」「提案」などのコミュニケーションの基本技術を、ロールプレイを中心として5回実施し、さらに価値観や目標を上げるようにと課題を与え、セルフコーチングを促したものとされている。
- (注9) アンケートの実施に際しては、本研究の意図を説明し、個人情報十分保護されることを前提に了解を取った上で行った。調査対象者の希望に沿うため、本稿では、回答者の細かい属性等については明記しないこととする。

参考文献一覧

- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』 NHKブックス
- 日本ライフセービング協会編 (2008) 『サーフライフセービング教本』 大修館書店
- 高野秀之 (2006) 「語学教師のための対照レトリック研究」『嘉悦大学研究論集』 49 (1) 67-85
- A. ダンダス著・池上嘉彦他訳 (1980) 『民話の構造：アメリカインディアンの民話の形態論』 大修館書店
- W. プロップ著・斎藤君子訳 (2009) 『魔法昔話の研究：口承文芸学とは何か』 講談社
- 山内亮子・和田貴子・柳澤厚生・鯨伸子：小池秀海 (2006) 「救急救命士課程学生のコミュニケーションスキル向上のためのコーチング実習の導入」『杏林医学会雑誌』 37 (1.2) 33
- Austin, J.(1971) *How To Do Things With Words*. Oxford.
- Hinds, J.(1983) " Contrastive Rhetoric: Japanese and English." *Text* 3. 183-195.
- Hinds, J.(1987) " Reader vs. Writer Responsibility: A New Typology". In Conner, U. & R. B. Kaplan eds. *Writing across Languages: Analysis of L2 text*. 141-152. Addison-Wesley.
- Hinds, J.(1990) ' Inductive, Deductive, Quasi-inductive: Expository Writing in Japanese, Korean, Chinese and Thai.' In Conner et al. *Coherence in Writing: Research and Pedagogical Perspective*.
- Labov, W. & J.Waletzky.(1967) " Narrative Analysis: Oral versions of personal experience", in Helm, J.(ed.) *Essays on the verbal and visual arts*, 112-144. University of Washington Press.
- Labov, W. (1972) *Language in the inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Blackwell.
- Searle, J.(1969) *Speech act: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge.
- Surf Life Saving Australia Limited. (2004) *Surf Life Saving Training Manual 32nd Edition Revised*. Mosby.
- 立川和美・稲垣裕美・小峯力 (2012) 「ライフセービングにおけるオーラルコミュニケーションについて」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』 5 19-28